



万国外科学会(ISS/SIC) 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

支部長挨拶

万国外科学会ニュース

万国外科学会
日本支部長
比企 能樹
(北里大学東病院長)



昨年暮れ、ISS/SIC本部よりニュースレターが届き、アカプルコにおける第37回の万国外科学会の無事終了とその内容の報告とが記されておりました。中でも新メンバーの紹介では、わが国から、最高97人もの加入が紹介され、誠にご同慶の至りであります。これも前会長出月康夫先生のお力と感謝しております。因みに1997年11月現在における日本支部の会員数は、260名になっており、今後の益々の発展がござることであります。

さて、次回の第38回学会開催は、オーストリアの首都ウィーンと決定されております。会長は、出月先生の後任にオーストラリアの Mr. Alastair R. Brown が、更にウィーンでの congress president には米国の Dr. Samuel A. Wells, Jr. が就任しております。

会期は、1999年8月15日から21日まで、既にコングレス事務が別記の通りに開催されており、ホームページも併せて開設されましたので、ご利用ください。

諸兄が先刻ご承知の如く、ウィーンは数々の著名な外科医を輩出しております。特に今更申し上げるまでもありませんが、巨匠 Theodor Billroth と、彼の高弟達の存在は特記されるものです。1881年にウィーン大学外科オペラチオンザールでこのチームによって行われた、胃癌の手術法 Billroth I, II 法は、つとに高名であります。彼らの名前は、諸々のヨーロッパの国々のみならず世界の外科学の、いわゆる「外科の樹」と称される太い幹となりました。

ウィーン大学は、其処に足を踏み入れた日本の医学者達に若い日に学んだ教科書を思い出させ、感動せしむるに足る歴史と伝統をほこっております。このような伝統の探索もまた非常に意義深いものといえましょう。

その歴史的な街において、最新医学の粋を集めた討論を行うことは、誠に有意義であると考えます。発表の Abstract の締め切りも、既に本年12月13日と定められました。諸兄におかれましては、ふるって古都の舞台で日ごろの研鑽の結果を発表して頂くべく、今よりご準備のほどお願ひいたします。

ドナウ河の蒼然たる流れに沿った文化のメッカ、ウィーンは、音楽、絵画、などなど、古来より日本人医学者の憧れの都であります。ウィーンの杜の緑は、8月の暖かい陽に照らされいやが上にも旅情を誘うことでしょう。中央墓地に眠る Billroth 等数々の学者、歴史を訪ねる散策もよし、街角でワインナーコーヒーを舐めながら行き交う人々を眺めるのもよし、またウィーンの森での松の小枝の目印をたよりに heurige (今年のワイン) を飲ませてくれる家を探すもよしと、学会での緊張をほぐすに十分な街であります。

何日滞在しても、何回訪れても飽きることのないこの街での学会開催は、より一層の参加者があることと私共も期待しております。

万国外科学会

第4回日本支部会総会議事録

1997年11月14日 7:30から8:30

場所：大阪リーガロイヤルホテル 28F クラウンルーム

議長：山川達郎日本支部事務局長

1. 比企能樹日本支部長挨拶
2. 出月康夫前万国外科学会会長挨拶
3. 庶務報告
 - 1) 会員異動状況 (1997年11月10日現在)

会員数	260名
新入会員数	27名 (1997年1月1日～97年11月10日)
退会会員数	8名
増員	19名
 - 2) 年会費納入状況 (1997年11月10日現在)

既納入会員数	199名 (75.5%)
--------	--------------
4. 広報委員会報告

支部ニュースを年2回発刊し、会員サービスとしている（会員に配布）。会員勧誘の意味を含めて日本外科学会総会時および日本臨床外科学会総会時に会場で配布するようにしている。
5. 日本支部会則（英語版）について

前回の総会で邦文支部会則7章が承認されている。
今回英文の支部会則8章を作成した。
邦文と英文で多少の相違点があり両案を会員に提示のうえ意見を求める検討する。
6. The 37th World Congress of Surgery (Acapulco) 報告

(ニュース第5号参照)
7. World Congress of Surgery の立候補について

2007年開催に立候補したほうがよいという意見が多くだされた。
ちなみに、会議の予算は約2億円程度である。
開催地としては外国では京都の知名度が高い。
立候補するためには準備委員会を設立し、準備委員長を決定しておかなければならぬ。自薦を期待する。
8. 他学会からの報告
 - 1) CICD (青木照明教授)

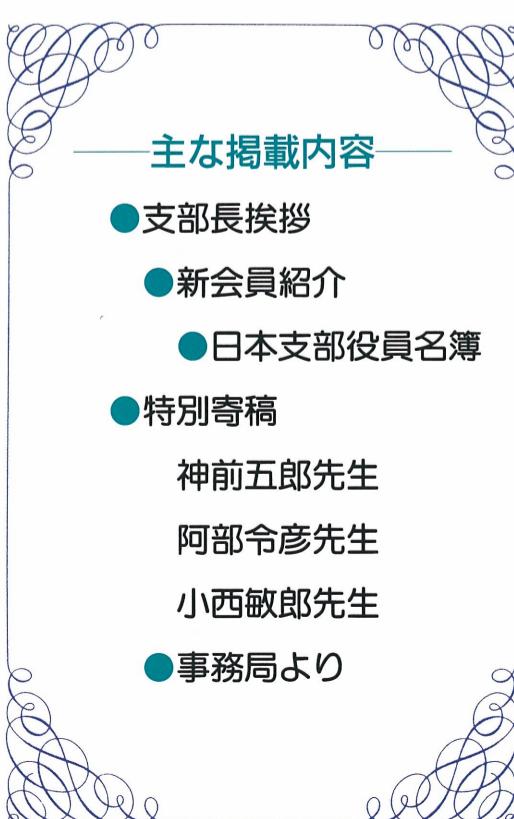
日本会員数は180名でほとんどSICの会員と重なっている。
会長が香港のウォン教授に交代した。1998年にマドリッドで開催予定である。
 - 2) その他の学会

国際脾臓学会（京王プラザホテル）が7月12日東京で開催される。
国際食道学会が9月にモントリオールで開催される。
9. その他

アカプルコの学会のプログラム委員会で語学力が不十分のためディスカッションが進まないことが話題に取り上げられた。発表内容がすばらしいのに質問をするとの確な答えがかえってこないことがあるのが残念であるというひともいた。おそらくは日本人を念頭においていた発言であろう。この件に関しては、語学が出来る若い人を通訳としてそばについてもらう、日本人の発表の多いセッションでは日本人の座長をたて、必ずアシストするようにするなどの意見がだされた。

出席者：39名

阿部令彦 金澤暁太郎 田尻孝 佐竹克介 青木照明 小西敏郎
 丸野要 曾我淳 白日高歩 鳴尾仁 酒井滋 炭山嘉伸 高井新一
 郎 平山廉三 冲永功太 出月康夫 北野正剛 中川原儀三 松本
 純夫 幕内博康 石川正昭 丸田守人 織畑秀夫 砂川正勝 田中
 雅夫 松本由朗 鈴木眞一 藤田佳宏 石山秀一 村田宣夫 川原
 田嘉文 高田伸 比企能樹 山川達郎 斎藤和好 磨伊正義 掛川
 晉夫 長町幸雄 石田清 (順不同、敬称略)



主な掲載内容

- 支部長挨拶
- 新会員紹介
- 日本支部役員名簿
- 特別寄稿
- 神前五郎先生
- 阿部令彦先生
- 小西敏郎先生
- 事務局より

特別寄稿

1981年モントルー万国外科学会の思い出



神前 五郎
(元大阪大学教授)

若い頃、恩師岩永仁雄先生の蔵書の整理を手伝っていて、万国外科学会誌を見、学会の話をうかがったのが縁でこの学会に入会したのだが、1981年の第29回万国外科学会は、私の現役時代最後の参加で、昔の手帳などを手掛りに、その思い出を記してみたい。

ところで、外国での学会に出る楽しみは、第1に久しぶりに外国の友人に会えることにある。もちろん自分の発表・討論も大事だし、いろいろの分野での世界の進歩・レベルを知ることも大きい収穫の1つだ。副次的収穫は、学会の開催される都市あるいは近隣の町の文化を肌で感じとることだ。地勢・気候・住民(何百年かの単位で幾層にも重なっていることが多い)と歴史が織りなすその町の文化は、食にも、飲み交す酒にも表れ、また大聖堂などの建造物に跡をとどめている。

この年は、8月31日から国際臨床化学会がウィーンであり、そのあと小川道雄君(現熊本大教授)ら教室の人達と分れて、ハルスタッフにケルト文化の跡をたずね、またハイデルベルク、ギーセンなどで頼まれていた講演をすませ、9月11日小川君らと再会してツェルマットに行き、マッターホルン観光をすませてモントルーへ出た。中村卓次教授御夫妻と偶然街角でお会いしたのもツエルマットであったかと思う。

さて、モントルーはレマン湖北岸の風光明媚な保養地で、20kmほど西のローザンヌと並んで、引退して老後を送る国際的有名人が多いと言われる。湖の背後の丘へ上の斜面は一面のブドウ畑で、良い白ワインができる。この地域にはBC5世紀ケルトのラ・テヌ文化が栄えたが、やがてローマの支配下に入り、ついでローマ帝国の衰退とゲルマン大移動に大きく影響されたが、最終的にブルグンド族が定着してフランス語圏となり現代に至っている。ローザンヌと違って新しい町なのか、古い教会などはなかったと思う。

開会式は13日夕5時からあり、14日から学会が会議場で始まった。その日の夕刻8時15分からメインホールで音楽祭が催された。7列8番の入場券が残っているが、50スイスフラン。ハンブルク交響楽団の演奏だったが、曲目は忘れてしまった。手帳によると学会の方は14日の午後5時48分から、また15日の10時48分からメインホールでの出番があったらしい。15日の午後は、学会をさぼってモントルーより少し東のショーンの古城を訪ねた。レマン湖畔に浮いているように見える美しい城には、宗教改革者ボニヴァールがサヴォイ公に捕われ、監禁された室があり、後世そこを訪れた詩人バイロン(ショーンの囚人—1816年—の作者)が柱に刻んだという文字が今でも読める。

16日夜モントルーのカジノでバンケットが開かれた。7時からカクテルという案内で、各自好みのカクテルやワイン片手に、少々のカナッペをつまみながらいろいろの人達と語り合う。学会会場で聞けなかった裏の話も出てくる。昔イタリアのシェナの市庁舎や、オランダのブルージュの僧院で、国宝級の絵画を前にして1時間も2時間も延々とワインとおしゃべりを楽しんだことがある。それがすむと、席について食事が始まる。約2時間、外科医はともかく酒に強く、よく食べる。

17日学会最終日、午後1時15分よりのフェアウェル・ランチを済ませて、船でローザンヌの湖畔の町ウーシーに行って一泊、翌日ジュネーブ経由で帰国の途についた。

新会員紹介 1997年1月から12月までに入会された先生方

医師名	病院名
石山 秀一	山形大学医学部第1外科
伊豆藏正明	大阪大学医学部腫瘍外科
岩崎 博幸	横浜市立大学医学部第1外科
大谷 剛正	北里大学東病院消化器外科
大和田 進	群馬大学医学部第2外科
奥山 明彦	大阪大学医学部泌尿器科
加納 宣康	亀田総合病院外科
金 昇晋	大阪大学医学部腫瘍外科
草野 満夫	昭和大学医学部第2外科
國土 典宏	癌研究会附属病院外科
權 雅憲	関西医科大学第1外科
篠沢洋太郎	慶應義塾大学救急部
芝 英一	大阪大学医学部腫瘍外科
渋谷 哲男	日本医科大学附属第二病院消化器病センター

万国外科学会 日本支部役員名簿

医師名	病院名	役職
比企 能樹	北里大学東病院	日本代表
出月 康夫	埼玉医科大学総合医療センター	前会長
山川 達郎	帝京大学医学部附属溝口病院	事務局長
馬場 正三	浜松医科大学	監事
田中 雅夫	九州大学医学部	監事
青木 照明	東京慈恵会医科大学	幹事
石田 清	埼玉医科大学	幹事
今村 正之	京都大学医学部附属病院	常任幹事
沖永 功太	帝京大学医学部	幹事
小原 孝男	東京女子医科大学	幹事
恩田 昌彦	日本医科大学	幹事
川原田嘉文	三重大学医学部	幹事
北島 政樹	慶應義塾大学医学部	常任幹事
北野 正剛	大分医科大学	幹事
小林 国男	帝京大学医学部	常任幹事
斎藤 和好	岩手医科大学	幹事
佐竹 克介	大阪市立大学医学部	常任幹事
佐藤 紀	埼玉医科大学総合医療センター	幹事
鳴尾 仁	北里大学東病院	常任幹事
白日 高歩	福岡大学医学部付属病院	常任幹事
曾我 淳	新潟大学医療技術短期大学部	幹事
高木 弘	名古屋大学医学部	幹事
高橋 俊雄	京都府立医科大学	幹事
高見 博	帝京大学医学部	常任幹事
田尻 孝	日本医科大学	幹事
中尾 昭公	名古屋大学医学部	幹事
中川原儀三	市立敦賀病院	幹事
平山 廉三	埼玉医科大学	幹事
磨伊 正義	金沢大学がん研究所付属病院	幹事
松野 正紀	東北大学医学部	幹事
松本 由朗	山梨医科大学	幹事
村田 宣夫	埼玉医科大学総合医療センター	常任幹事
門田 守人	大阪大学医学部	幹事
山岡 義生	京都大学	幹事
酒井 滋	帝京大学医学部附属溝口病院	幹事

万国外科学会(ISS)入会のご案内

現在万国外科学会(ISS)では新規入会外科医師を広く募集している所です。皆様のお近くにこの万国外科学会にまだ入会されていない先生がいらっしゃれば入会をお勧めください。従来と異なり、外科医としての経験がそれほどなくても入会が認められるようになりました。国際学会に興味のある若い先生方をお誘いください。入会申し込み用紙は北里大学東病院消化器外科 鳴尾仁先生までご請求ください。

電話: 0427-48-9111 (内線2864) FAX 0427-45-5582です。

年会費 120ドル (他に日本支部年会費5千円)

会員の特典

- 雑誌 World Journal of Surgery (年々Impact factorが上がっています) を毎号受け取れます。
 - 2年に1回の学術集会(来年はウィーン)での参加費が割り引かれます。
 - 本部と日本支部から各々ニュースが送られてきます。
 - 学術集会で更に活躍できます(座長、特別講演などに推挙されます)。
- (万国外科学会日本支部 広報委員会)

新会員紹介 1997年1月から12月までに入会された先生方

医師名	病院名
捨田利外茂男	帝京大学医学部第1外科
鈴木 真一	福島県立医科大学第二外科
谷川 尚彦	大阪医科大学一般消化器外科
辻谷 俊一	鳥取大学第1外科
中田 瑛浩	山形大学医学部泌尿器科
橋本 大定	東京警察病院
蓮見 昭武	藤田保健衛生大学外科
前原 喜彦	九州大学第2外科
松木 盛行	埼玉医科大学第2外科
松本 賢治	慶應義塾大学医学部外科
丸田 守人	藤田保健衛生大学医学部外科
村井 勝	慶應義塾大学泌尿器科
森瀬 昌樹	北里研究所メディカルセンター病院外科
山下 弘幸	野口病院外科

特別寄稿

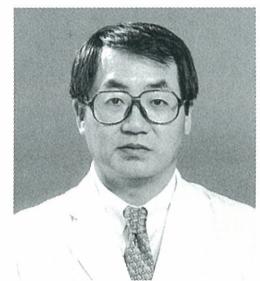
万国外科学会への貢献を祈念して

阿部 令彥
(慶應義塾大学名誉教授)



日本支部事務局からの御案内

万国外科学会日本支部常任幹事 嶋尾 仁
(北里大学東病院消化器外科)



万国外科学会（International Congress of Surgery）は1902年（明治35年）外科関係の諸問題に関する研究成果を発表し、討論することを目的として、Brusselに於て創立された学術会議である。狭義の外科のみならず、脳外科・胸部外科・小児外科・整形外科・泌尿器科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・形成外科など、外科系の各分野を包括している。その活動と業績は幅広く世界的に高く評価され、注目されている。会議のための総会は古くは3年毎に欧米各国で開催され、外科学の発展と人類の健康、福祉の向上に指導的な役割を果たして来た。日本外科学会が1899年（明治32年）に創立されたのでその3年後に万国外科学会が創立されたことになる。日本外科学会が間もなく創立100周年を迎えるに当って我が国の指導的な外科学者を中心として、その準備に奔走して居られるのを眺めながら、本会の100周年に対して、日本としても相応の貢献が必要であると考えている。

記念すべき第1回総会は1905年に、外科医 Theodor Kocher を会長として Brussel で開催された。その後の歴代会長には、歴史的人物が名を連ね、日本からは1932年（昭和7年）Madrid で開催された第9回総会に、故塩田広重博士が出席して以来多くの外科医が参加している。その間の事情を、関東労災病院名誉院長石川浩一先生が、万国外科学会日本支部ニュース第5号（1997年11月10日）の特別寄稿に述べて居られる。

また、第27回万国外科学会議は1977年9月に京都国際会議場で開催された。日本で本会が開かれたことは、東洋で初めてのことであり、先達の本会に対する御功績が如何に高く評価されたかを物語っている。開会式には、催者側より、日本大会々長小沢凱夫教授、組織委員会々長斎藤溟教授、プログラム委員長石川浩一教授、財務委員長島田信勝教授が当られ、万国外科学会国際本部より、当時の会長F. Gerbode教授、会議々長Sir Thomas Holmes Sellors教授の挨拶があった。

以上のような経緯から、万国外科学会と深いかかわりを持つ我が国としては1995年8月Lisbonで開催された第36回World Congress of Surgery/International Surgical Weekに400名をこえる会員が出席した。加えてLisbonでのISS/SICの総会で、出月康夫教授がISS/SICの会長に選出された。誠に喜ばしい限りであり、このような名誉が我が国に与えられたことは、日本支部長比企能樹教授、日本支部事務局長山川達郎教授を始め関係諸先生の絶えざる御努力の賜と感銘を覚える次第である。

冒頭に申し上げた如く、21世紀に向って我が國の外科学が万国外科学会の発展にさらに大きな貢献をなすことは、歴史的に見ても当然のことであり、その意味からも万国外科学会日本支部ニュースは、歴史の流れを把握し、大きな立場から、各会員のかかわる位置づけを考えるのに役立つものと確信する次第である。

万国外科学会日本支部事務局では、日本支部運営のための業務を通じて、会員の皆様に微力ながら、様々なサービスを行っております。事務局は日本代表の比企能樹教授のお膝元である、北里大学東病院消化器外科にあります。専属の事務員をおく程の業務もなく、財政上も豊かとはいえないためにも、もっぱら医局の秘書さんに手伝ってもらっています。業務内容は新入会や退会の手続きのお伝い、支部総会の御案内、支部総会の議事録作成や支部会ニュース、支部会費の経理、World Congress of Surgeryに関する業務、名簿管理と作成などです。この業務内容の御説明と御案内をしたいと思います。

入会には規定の入会申し込み書、英文履歴、業績が必要です。書類の書き方に関しましてはサンプルを用意しておりますので、必要な方は事務局（Fax : 0427-45-5582）までお申し込み下さい。2名の会員の推薦と日本代表の署名が必要ですが、必要とあらば事務局の方で署名いたします。業績は論文10編以上あれば問題ありません。邦文論文は、論文タイトルなどを英文に翻訳していただけましたら結構です。入会申請はSIC/ISS本部の理事会で審議され、認定されましたら本部から直接申請者に文書で連絡がいきます。連絡がきましたら、認定書類のコピーを日本支部事務局まで送付ください。このコピーの送付がありませんと、日本支部への登録が遅れ、さまざまご案内をお送りすることができません。本部の年会費の払い込は毎年12月末までに会員に払い込み書が送付されてきます。退会の連絡はSIC/ISS本部へ御自身で行っていただくことになっておりますが、困難な場合は当事務局へ御連絡下さい。事務局から連絡させていただきますが、何通かをまとめて処理する関係上、多少遅れますことを御了承下さい。通算15年以上学会のActive Memberであった方はSenior Memberへの申請資格があります。Senior Memberを希望する旨、SIC/ISS本部へ文書で申請をすることになっております。Senior Memberになると学会本部や日本支部への年会費は必要なくなります。投票権はありますが役員を努めることはできません。World J. of Surgeryは有料で購読可能です。SIC/ISS本部への申請も原則的にはご自身でやっていただいておりますが、困難なようでしたら、事務局へ御連絡下さい。支部総会は現在のところ外科学会総会と臨床外科学会総会の時に各会長の御好意で会議室をお借りし、年2回開催しております。開催通知などは事務局長である帝京大学溝口病院の山川達郎教授、酒井 滋講師にお願いをいたしております。総会議事録の作成や支部会ニュースは埼玉医大総合医療センターの村田宣夫助教授にお願いをいたしております。World Congress of Surgeryに関する業務では、登録用紙や抄録は会員の皆様には本部より直接郵送されますが、事務局でも、一定の部数を用意しております。会員でない方で発表を希望される方や参加される方がいらっしゃいましたら、御連絡いただければ、お送りいたします。昨年のアカブルコの学会ではメキシコでの印刷が大幅に遅れ、皆様には大変なご迷惑をお掛けしたと思います。日本支部へは、学会の座長の推薦依頼などがきますので、座長をご希望なさる方や、推薦なさりたい方がいらっしゃいましたら、事務局まで御連絡ください。役員会で検討のうえ御推薦申しあげます。日本支部の会員名簿は現在作成中で御座います。会員の方にこちらで登録されている住所や所属の変更がないか、昨年にお問い合わせの御連絡をさしあげましたが、変更される方が多いため、現在も作業中でございます。今年度中には会員名簿を完成したいと思っております。日本支部はここ数年で、帝京大学の高見教授をはじめ幹事の先生方の多大な努力もあって、新入会員数は前回のリスボンの学会時より100名弱増加しました。この増加数は勿論世界一で、Active Memberの数では米国について第2位となりました。日本でのWorld Congress of Surgeryの開催も夢ではなく現実に手の届くところまでできています。皆様のご協力で、日本開催を是非実現しましょう。ながらながらと取り留めもなく書きましたが、当事務局では会員の皆様の御便宜を少しでもはかれればと思っておりますので、なにか御座いましたらどうぞ、御遠慮なく御相談、御利用下さい。

ムコスタの特徴

1. 胃粘膜のPG 増殖作用・フリー・ラジカル抑制作用を併せ持つ

初めての胃炎・胃潰瘍治療薬です(トランクル・vi)

2. NSAIDsや *Helicobacter pylori* (ウイルス)による胃

粘膜障害を抑制します。

3. 非炎性・特に胃から出血に備えた効果を示します。

4. 非炎性・特に胃から出血に備えた効果を示します。

5. 制剤開発率は約69% (49/72,275)でした。主な副作用は、

嘔吐(6%)、GPT上昇(4%)等でした。

・ NSAIDs non-steroidal anti-inflammatory drugs(非ステロイド性内因薬)

・ GOUH Quality of ulcer healing (溃疡治癒の質)

・ 胃 粘膜炎・胃潰瘍の急性増悪期

(効能・効果)

・胃炎

・下部消化管の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善

・急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

(用法・用量)

・胃痛

通常、成人には1回(レバミピドとして100mg)を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。

・下部消化管の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善

・急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

通常、成人には1回(レバミピドとして100mg)を1日3回経口投与する。

【使用上の注意】 抗種

副作用(まれに)：0.1%未満、ときに：0.1~5%未満、副腎炎：5%以上又は頻度不明。

①過敏症：まれに発熱、蕁麻疹、粟疹様皮疹症等の過敏症がおこることがある。このこのような場合には投与を中止すること。

②消化器：口腔炎、まれに便潜血、胃腸炎、腹痛、下痢、嘔気、嘔吐、胸やけ、腹痛、けふ等があらわれることがある。

③肝：異常：まれに GOT、GPT、Y-GTP、AI-PGT 上昇等の肝機能障害があらわれることがある。

④血：濁：まれに白血球減少があらわれることがある。

⑤その他：乳糖不耐症、乳汁分泌亢進症、月经異常、めまい、また、まれに BUN 上昇、異常、頭頸部の異物感等があらわれることがある。

＊その他の用法上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

胃炎・胃潰瘍治療剤

⑥ **ムコスタ錠** 100
Mucosta® tablets

薬価基準収載

大塚製薬株式会社
大塚製薬株式会社 学術部
東京都千代田区神田司町2-9
大塚製薬第二ビル

(95頁)

特別寄稿

万国外科学会の日本開催に向けて

小西 敏郎
(関東通信病院外科)



大阪で開かれた前回の日本支部総会のことであるが、アカペルコでの総会で「日本からの講演発表は発表内容が素晴らしいが、発表後のdiscussionで少し問題があるので対策を講じてほしい」と外国から要望があったことを伺った。私自身もこれまで国際学会での日本からの講演発表に寂しい感じがすることが時々あった。ひとつには、演者は優れた内容の講演を流暢な発音で英語原稿を読みあげるにも拘らず、質問に移ると、「下手な英語で申し訳ありません。私は英語ができませんので質問をお受けできません」と原稿を読みながら演壇を降り始める発表を聞いたことが一度ならずある。本人は日本の謙遜の気持ちからだろうが、非英語圏の国々からの発表に比べて遙かに聞き取りやすい英語のことも多く、事前に英語の発音を一生懸命に勉強した努力がひしひしと感じられる講演発表の時もあり、その時は発表者の努力がもったいないと感じられることもあった。

ところで国際学会での発表の意義は、聴衆の前で原稿を読み上げて、学会発表したとの事実を残せばよいのではない。発表後の質疑応答を通じて、同じ分野での外国の研究者と意見を交わして外国での研究状況を知り、また知己を増やすきっかけとして、自分の研究の発展の礎とし、さらに自分にとっての国際交流の契機とすることも重要なである。発表のあとの討論を通じて友人が増えるのは自分の研究にも役立つし、またこのようなことを契機として外国へ招待されることもあると聞いている。

国際学会では英語が自国語でない外国人も多い。質問者が流暢な英語でない場合もある。どうしても質問の意味がわからない場合は、理解できる英語の単語を一つ二つ捉えて、その単語に関連する問題について自分の意見を述べるのもよいであろう。大阪での日本支部会では、「英語が苦手の発表者は語学のできる人を通して演者の傍らについてもらうようにするとか」、「日本人の発表の多いセッションには語学のできる日本人の座長をたててもらう」などの意見がだされた。私自身も質問中の学術用語や固有名詞（ヒルシュシュブルングやソマトスタチンなど）が全く理解できずに壇上で周章狼狽し、立ち往生した経験を克明に記憶し

ている。幸いに会場のフロアにいた友人が助けてくれて、ことなきをえたので、座長やフロアの日本人が質疑応答の際に協力できるように工夫するのも前進的な方法であると思われる。

しかし、国際学会での日本人の発表後の討論については英語の上手下手の問題だけではないようと思う。国際学会で日本人の発表がもっとよく認知されるには、普段から本音で討論する習慣を身につけるべきである。日本の国内学会においても、ほとんどの講演発表は単に原稿を読まずに演者自身がスライドをポインターで指しながらわかりやすく説明し、原稿なしでも制限時間内に、必要なことをすべて発表できるような習慣を訓練するべきである。私はアメリカ留学中に、留学先のハーバード大学の外科の医局で、SSO (Society of Surgical Oncology) 学会の発表の予行に参加したことがある。彼らはどんな学会でもフリートーキングで発表することを原則としているので、一つの学会毎にその学会の3週前から予行会を毎週繰り返し、発表者はフリートーキングで丁度時間内に終わるための練習を繰り返していた。日本のように、同じような内容の発表を繰り返す学会・研究会を毎週のようにこなさなければいけないような環境では、このような念入りなフリートーキングの練習をする余裕はなかなかないのでしょう。

ところで9年先の西暦2007年の万国外科学会のWorld Congress of Surgery をできれば日本で開催したいとの希望をお持ちの先生方が多いと伺った。日本が立候補するには予め準備委員会を設立して準備委員長を決める必要があるとのことである。準備委員長としてどなたか若手の大学教授が立候補されればよいのだろうが、なかなか自薦者が現れないようである。9年以上も先のことなので、どなたも自分が事務局をお引き受けできるとは現時点では決意できないので、自薦者がなかなか現れないのではないかと思う。9年以上も先に万国外科学会をgeneral secretaryとして開催できるような方は、現在は新任かそれに近い教授で、現時点では自分の教室の臨床・研究体制の整備などの教室の基礎作りに専心されているはずである。そこで私の提案としては、日本部会の参加者の中で10年以上任期を残している外科教授で有志の方が集まり、準備委員会を設立して、World Congress of Surgery 総会を招致する運動を始めればよいのではないかでしょうか。そして必ずしも準備委員会の委員長や副委員長が将来 general secretaryになるとは限らない集団体制を確認してスタートすればよいのではないかでしょうか。世界から多数の外科医が集まる万国外科学会が1977年以来久しぶりに日本で開催されることを期待して筆を執らせて頂きました。

多価・酵素阻害剤／一般名：ウリナスタチン (指) 要指

ミラクリット

MIRACLID 25,000/50,000/100,000単位

【効能・効果】

- 急性肝炎（外傷性、術後及びERCP後の急性肝炎を含む）
- 慢性再発性肝炎の急性増悪期
- 急性循環不全（出血性ショック、細菌性ショック、外傷性ショック、熱傷性ショック）

【警告】

本剤の投与は緊急時に十分対応できる医療施設において、患者の状態を観察しながら行うこと。

【使用上の注意】

1. 一般的注意
 - (1) 本剤を急性循環不全に用いる場合には、次の点に十分留意すること。
 - 1) 本剤の投与は一般的なショックの治療法（輸液療法、酸素吸入、外科的処置、抗菌剤等）に代わるものではない。
 - 2) ショック症状が改善すれば、投与を中止すること。
 - (2) 本剤は賦形剤として精製ゼラチンを含有している。ゼラチン含有製剤の投与により、ショック、アナフィラキシー様症状（荨麻疹、呼吸困難、口唇浮腫、喉頭浮腫等）があらわれたとの報告があるので、問診を十分に行い、投与後は観察を十分に行うこと。
 - 2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）
 - ウリナスタチン製剤に対し過敏症の既往歴のある患者
 - 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）
 - (1) 薬物過敏症又はその既往歴のある患者
 - (2) 過敏性皮膚症
 - (3) 過去にウリナスタチン製剤の投与を受けた患者 [過敏症があらわれたことがある。]
 - (4) ゼラチン含有製剤又はゼラチン含有の食品に対して、ショック、アナフィラキシー様症状（荨麻疹、呼吸困難、口唇浮腫、喉頭浮腫等）等の過敏症の既往歴のある患者
 - 4. 副作用（まれに：0.1%未満、ときに：0.1~5%未満、副腫なし：5%以上又は頻度不明）
 - (1) 重大な副作用
 - ショック：まれにショックが起こることがあるので、観察を十分に行い、

血圧降下、胸内苦悶、呼吸困難等があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2) その他の副作用

- 1) 血液：まれに白血球減少、好酸球增多等があらわれることがある。
- 2) 肝臓：ときにGOT、GPTの上昇等があらわれることがある。3) 過敏症：ときに発疹、発痒感等があらわれることがあるので、このような場合には投与を中止すること。4) 消化器：まれに恶心・嘔吐、下痢等があらわれることがある。5) 注射部位：まれに血管痛、発赤、癰瘍感があらわれることがある。

5. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

6. 妊婦・授乳婦への投与

- (1) 妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊娠又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合には投与すること。
- (2) 物質実験（ラット）において乳汁中の移行を示唆する結果が報告されているので、授乳中の婦人は投与しないことが望ましいが、やむを得ず投与する場合には授乳を避けさせること。

7. 小児への投与

小児に対する安全性は確立していない（使用経験が少ない）。

8. 適用上の注意

- (1) 本剤は溶解後、速やかに使用すること。
- (2) 本剤とメシル酸ガベキサート製剤あるいはグロブリン製剤との混注は避けること。

※詳細は添付文書をご参照下さい。

健保適用



資料請求先
持田製薬株式会社

東京都新宿区四谷1丁目7番地 TEL 03-5311-1600 (N10)

薬価基準収載

蛋白分解酵素阻害剤

注射用エフオーワイ

注射用メシル酸ガベキサート

蛋白分解酵素阻害剤

注射用エフオーワイ500

注射用メシル酸ガベキサート

■使用上の注意（抜粋）

1. 一般的注意 まれにショックがあらわれることがあるので、十分な問診と救急処置のとれる準備を行い、投与にあたっては観察を十分に行い、血圧低下、発赤、癰瘍、不快感、嘔吐等の症状があらわれた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行ふこと。
2. 禁忌（次の患者には投与しないこと） 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者。



●効能・効果、用法・用量、及び、その他の使用上の注意等、注射用エフオーワイ、注射用エフオーワイ500 各々の添付文書をご覧ください。

製造発売元
資料請求先
ONO

小野薬品工業株式会社
〒541-8526 大阪市中央区道修町2丁目1番5号
980225

編集後記

◆長野オリンピックでは数々の名勝負があり、感動が生まれたようだ。医者という職業柄オリンピックの試合はすべて結果がわかった後のスポーツニュースでしか見られなかったが、それでも清水のスピード・スケートや船木、原田らのジャンプなど日本勢の活躍は感動的であった。そのオリンピックが終了してから長野ではオリンピックに関連してさまざまな交流があったことが報道されている。ノルウェーのスキーリストと長野の小学生との交歓会や、外国からの応援団の人々がホームステイした話などに気づいたが、聞くところによるとそれ以外にもいろいろな国際交流のあったことが報道されているという。そういう話を聞くと長野でオリンピックを開催した甲斐があったと思う。

◆来年のウィーンでの万国外科学会は良い発表をすることが第1の目標である。しかし、はるばるウィーンまで出かけるのであれば同じセッションで発表した諸外国の医師と何らかの交流があつても良いだろう。学会の期間に開かれるレセプションで思わず医師と知合いになることもあるだろう。本号の特別寄稿で神前五郎先生や小西敏郎先生が述べておられるように国際学会では研究成果を発表すること以外にも人とのふれあいという重要な意義・目的がある。学問の交流が人ととの国際交流へ、更に何らかの国際協力へと発展することもあるだろう。まず学会に参加すればそのスタート台に立つことになる。

◆実りあるウィーン行にするために私もそろそろ研究の整理を始めなくてはならない。

（村田宣夫）